

美術鑑賞教材の適正化に関する研究

島谷あゆみ 天野 紳一 橋 由紀恵 松本 裕子
三根 和浪 井戸川 豊

1. はじめに

図画工作科・美術科において鑑賞の指導は、近年ようやく見直され始めた。「みる・感じる」ことは、「描く・作る」ことの原動力になり、図画工作科・美術科の究極の目的である人間力の育成に欠かせない。これまで学校現場では、感じ、考え、表現できる豊かな人間を育成するため、鑑賞の指導が地道に行われてきた。

その一方で、教科書を紐解くと、『風神雷神図屏風』のように小・中学校両方に掲載されている等、掲載の基準が明らかでないまま各学年の鑑賞教材として定着してきている例もあり、鑑賞教材の発達段階における適正化に関して先行研究はほとんどなされていない。

児童・生徒の実態に合わせた鑑賞の指導が行えるよう、教科書の掲載内容を精査することは、これからの鑑賞教育に資することであり、教育現場と大学をつなぐ附属学校教員にとって重要な課題であると考え、本研究に取り組むことにした。

2. 研究の経緯・目的・方法

(1) 研究の経緯

これまで私たち図画工作科では、情操を育む上で重要なinputの役割を担うにも関わらず、表現に比べて単独で扱われる機会の少なかつた鑑賞領域に目を向け、児童が主体的、能動的に取り組む鑑賞題材の開発に取り組んできた。また美術科でも、時に異なる研究テーマを掲げながらも、日々の授業づくりや研究会等の機会を捉えて、鑑賞学習の充実を目指して小学校との連携を深めてきた。(相互の授業観察、乗り入れ授業、合同授業・協議会、アンケート調査の実施等)このような経緯から、小・中互いの実践研究における共通の土壌であり、学習指導要領改訂以来、言語活動とのかかわりにおいて改めてクローズアップされている鑑賞能力の育成を研究テーマに、「9年間の学びが繋がる授業づくり」を目指す共同研究に取り組んできた。

研究推進にあたり、まず鑑賞能力を形成する具体的な内容を次の3つの要素に分けて整理した。

①観察・直観

「美術作品に表現された色や形などの関係（均衡や不均衡、動き、リズム、多様性と統一性、強調、調和などの造形的イメージ）を直感的にとらえ、自己との対話を繰り返す中で感じ取ること。」

②コミュニケーション

「美しさ、よさ、おもしろさなど、対象から感じ取ったイメージを、言葉や文字、あるいは他の視覚的な情報手段等を用いて伝え合い、他者との関わりの中で広げ、深めていくこと。」

③思考・判断

「美術作品の生まれた背景や歴史的・文化的遺産としての価値、モチーフや色、技法などのもたらす効果や社会的影響等も踏まえて解釈し、自らの基準に照らして価値判断すること。」

これらの要素はそれぞれ単独で存在するものではなく、感じ取り、思考し、伝え合う活動の中で同時に働き合い、主体的・能動的な鑑賞学習体験を繰り返す中でスパイラルに高まっていくものと考えている。

(2) 研究の目的

前述の①～③のサイクルの活性化を目指す時、その大前提となるのが「よき美術作品」との出会いであることは自明である。つまり、児童・生徒の感性を刺激し、イメージを駆り立て、豊かな言葉（内言、外言を含む）を引き出し、思考・判断を促すことのできる作品をどのようにして選定するかということが、鑑賞の授業づくりにおいて我々がまず直面する問題となる。

そこで、本研究の目的を、小・中学校9年間で鑑賞の授業を実施するにあたり、どのようなタイプの美術作品が「適正」であるかを検証することとし、本研究における「適正」な作品の条件とは、「より多様な児童・生徒の気づきを引き出すものであること」と設定した。

ここで配慮すべきことは、6歳から15歳という学齢期の児童・生徒の発達段階の広がりである。東雲小・中学校では、「9年間の学びのつながり」をテーマに、児童・生徒の発達段階を次のように区分している。

I期…小学校1年生～4年生

II期…小学校5,6年生, 中学校1年生

III期…中学校2,3年生

パーソンズはその著書『絵画の見方』¹⁾の中で、絵画鑑賞における美的体験の認知上の発達段階を次のように示している。

第1段階：自己中心的な好き嫌い (favoritism)

第2段階：美しさと写実性 (何が描かれているか) への注目 (beauty and realism)

第3段階：表出力 (どのように表されているか) への注目 (expressiveness)

第4段階：様式と形態への注目 (style and form)

第5段階：自律性 (autonomy)

これらの考えに日々の授業実践を通して把握した実態等を加味し、本研究では鑑賞活動における児童・生徒の具体的な様相を次のように設定した。(表1)

表1 鑑賞活動における児童・生徒の具体的な様相

想定される児童・生徒の具体的な様相	I期	II期	III期
第1段階：自己中心的な好き嫌い (favoritism) ・他人の見方をほとんど意識しない。 ・色に強く魅せられたり、題材(モチーフ)に勝手な思い入れをしたりする。 ・色がカラフルであれば、それだけよい絵だと感じる。 ・好きなように連想したり思い出にふけったりし、勝手な空想の世界に遊ぶ。 ・写実的に描かれていない絵画であっても問題にならない。			
第2段階：美しさと写実性 (何が描かれているか) への注目 (beauty and realism) ・題材(モチーフ)が魅力的でしかも表現がリアルであればよりよいものになる。 ・優れた技量や根気、それに慎重さが称賛される。 ・美やリアリズム、それに腕前が、判断の客観的な基準となる。 ・暗黙のうちに他人の見方を考慮に入れている。			
第3段階：表出力 (どのように表されているか) への注目 (expressiveness) ・題材(モチーフ)そのものの美よりも表現されたものの方が重要となる。 ・感情の表出力が問われる。 ・創造性、独創性、感情の深さが新たに評価されるようになる。 ・題材の美や様式のリアリズム、芸術家の技量の不適切性を見抜くことができる。 ・作品の許容範囲がさらに広がる。			
第4段階：様式と形態への注目 (style and form) ・対話しながら、より意義深い事柄とそうでない事柄を見分けていく。 ・協力し合うおかげで作品を鋭敏に見ることができる。 ・質感や色彩、フォルム、そして空間に重点がおかれる。 ・絵画の様式的、歴史的な重要性が認められ、表現することのできる意味の種類が拡大する。 ・伝統という視野を全体として受け入れることができるようになる。			
第5段階：自律性 (autonomy) ・自分自身の経験に及ぼす影響に疑問をもち、人は見えると思うものを本当に見ているのかどうかということの問題にするようになる。 ・自己の経験の特徴をはっきりと意識する。 ・その様式は見る側に対してどう働きかけてくるのか、何を表現することができるか、こちらの経験に対していかなる傾向を与えてくれるのかという様式の価値が重要な問題になる。			

パーソンズによれば第1～3段階までは生得的な要因によるものであり、ほぼ年齢に伴う発達段階であるが、第4段階以降では学習による要因がより大きく影響してくるといふ。しかし、第3段階までの発達における環境要因の影響や、思春期における複数の発達段階の混在、さらには第3段階と第4段階の順序性についてのパーソンズ理論の妥当性を再検討する必要があるとの研究結果も報告されている。

つまり、これらの段階が単純に低次から高次へと一方向的に発達していくものであるとは限らないという可能性が示唆されているのである。同研究では小学生における第2段階の優位性や、第4段階の発達に関わる学習の時期については思春期が適切であるとの指摘もなされている。以上のことから、各期の児童・生徒が表1の網がけの部分に示す発達段階にあるものと想定して本研究を進めることとした。

(3) 研究の方法

任意に選定した3タイプの絵画作品の鑑賞を通して得られた児童・生徒の気づきを、量的・質的に分析する。

①対象児童・生徒

附属小・中学校の児童・生徒
 東雲小学校：小1 (32名)・小3 (32名)
 小6 (37名)
 三原中学校：中1 (40名)
 東雲中学校：中3 (39名)

②作品の選定

今回選定したのは、調査結果の学校現場での活用も踏まえ、何れも現在出版されている図画工作、美術の教科書（日本文教出版、開隆堂）より選定した次の3作品である。

A：『セネキオ』（1922年、油彩）

クレー（Paul Klee, 1879-1940）



表現主義、シュルレアリスムなどの何れにも属さない独特の画風をもつクレー。本作品も抽象絵画と具象絵画の境界を融合したような色彩とフォルムで表現されている。小学校1年生の教科書の冒頭で紹介されている。

I期の児童は色に強く魅せられ、カラフルであることを好む傾向にある。空想・連想の世界に自由に遊ぶこの時期の児童にとっては、写實的に描かれているこ

とはさほど重要ではない。

B：『夜のカフェテラス』（1888年、油彩）

ゴッホ（Vincent van Gogh, 1853-1890）



ポスト印象派の代表的画家ゴッホによる1枚。アルルの星空の下、人々で賑わうカフェテラス。いわば日常を描いた作品である。印象派の影響を受けた光の表現と独特の力強いタッチが特徴的である。小学校6年生の教科書で紹介されている。

II期の児童・生徒は魅力的な題材を好み、写実性や技量、美やリアリズムを重視する傾向にある。

C：『記憶の固執』（1930年、油彩）

ダリ（Salvador Dalí, 1904-1989）



シュルレアリスムを代表する画家ダリの代表作。文字通り超現実的な世界を描いた作品である。中学校美術教科書2・3年下で取り上げられている。

III期の生徒は感情の表出力、創造性、独創性、題材の美を重視し、表現に対する許容範囲も広がってくる。

限られた時数の中で可能な限り多様なスタイルの作品を提示できるよう、風景画・人物画、印象派・キュビズム・シュルレアリスムの影響を受けた作品、異なる国の画家の作品となるよう考慮した。

③調査方法

個々が絵の細部までじっくり鑑賞できるよう、一人に1枚ずつ手元資料として図版(A4サイズ、ラミネート加工)を配布し、「絵を見て、見つけたこと、感じたこと、考えたことをできるだけたくさん書きましよう。」というパフォーマンス課題を与えた。

また、調査に用いるワークシートは罫線で区切った表の形式とし、気づきを書く枠毎に通し番号を付けてカウントできるようにした。(図1)じっくりと考えた



図1 調査用ワークシート

いわゆる“鑑賞文”ではなく、発見した色やモチーフ等を単純に表現した単語や、直感的な印象を言葉にした単文節による表現を促すことで、どの段階の児童・

生徒にも取り組みやすいものにするためである。また、「より多く」という意識の喚起によってある種のゲーム性を加味し、特に鑑賞に興味を持たない児童・生徒であっても能動的に楽しく取り組むことができるようにした。

調査の実施時間については、文字を書くスピードなど、普段の授業の様子から把握している各期の児童・生徒の学習実態を考慮し、次のように設定した。

- I期（小学校1年生・3年生）→7分間
- II期（小学校6年生・中学校1年生）→6分間
- III期（中学校3年生）→5分間

④検証方法

<気づきの量の比較>

設定した時間内に児童・生徒が書いた気づきの総数を、3つの作品について学年別に比較した。「鑑賞に適した作品はより多くの気づきを生むであろう」という仮説の検証である。東雲小学校では過年度の研究において、児童の書いた鑑賞文を造形的な要素と結びついた気づきに分け、その量と質で鑑賞の深まり具合を判断した結果、一定時間内に書かれた気づきの数が鑑賞の深まりを示す尺度の一つになり得るという知見を得ている。

<気づきの質の分類>

作品と気づきの量との関係性を探るため、気づきの質的な分類を行い、児童・生徒の認知の傾向を調査した。分類にあたって拠り所としたのが表2である。表1で示した鑑賞活動における児童・生徒の具体的な様

表2 気づきの質の分類基準

I	<ul style="list-style-type: none"> ・理由を伴わない漠然とした感覚（「好き」「おもしろい」「不思議」等） ・作品の世界から離れた空想
II	<ul style="list-style-type: none"> ・色や形、モチーフや場所など、画面に描かれた客観的事実の羅列
III	<ul style="list-style-type: none"> ・画面に描かれた客観的事実を根拠とする気づきや思い、比喻表現など
IV	<ul style="list-style-type: none"> ・客観的事実を結びつけて（総合、対比）生まれた気づきや思い ・画面から直接見取ることのできない部分を推察したもの ・科学的概念と結びつけた気づきや解釈
V	<ul style="list-style-type: none"> ・色使いや描き方、構図や技法など、造形要素に関する気づき ・作品の主題（表現意図）に対する自分なりの解釈 ・科学的概念を踏まえた解釈や批評、価値判断

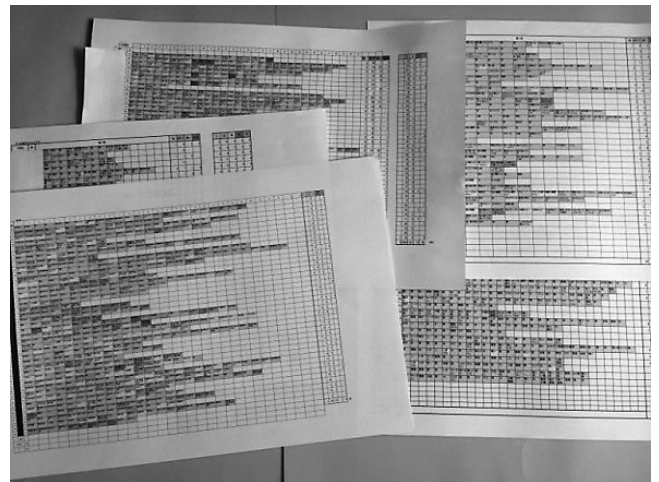


図2 気づきの集計表

相をもとに、実際に表記された「言葉」のレベルで気づきの質を分類するための基準である。

児童・生徒の書いた気づきの多くが単語や単文節の表現であったが、学年が上がるに連れて複数の意味を内包した長文の記述も増えてきた。その場合には意味のある文節毎に区切り、I～Vの五段階に分類して集計表（図2）に転記し、整理し直した。気づきの量に加えて、それぞれの作品でどの段階の気づきの割合が多くなっているかを把握することも、児童・生徒の発達段階に応じた鑑賞教材の適正化につながる重要な要因であると考えている。

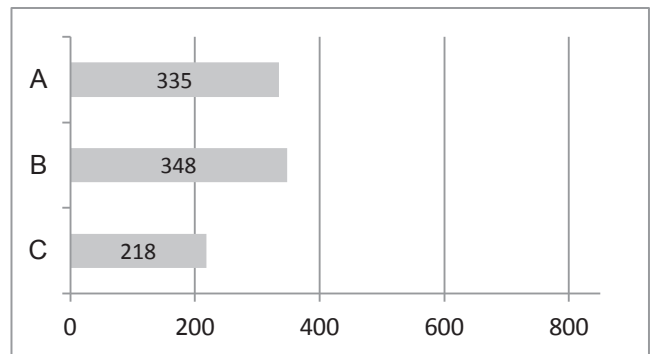
3. 結果と考察

調査の結果（気づきの量と質の分類）を学年毎にまとめ、考察を加えた。グラフ中のA～Cはそれぞれ次の絵を表している。

A	クレー 『セネキオ』
B	ゴッホ 『夜のカフェテラス』
C	ダリ 『記憶の固執』

(1) I期：小学1年生…32名

<気づきの量（総数）>



作品A、Bでは共に一人平均10個を超える数の気づきが出されている。小学校1年生という発達段階、そ

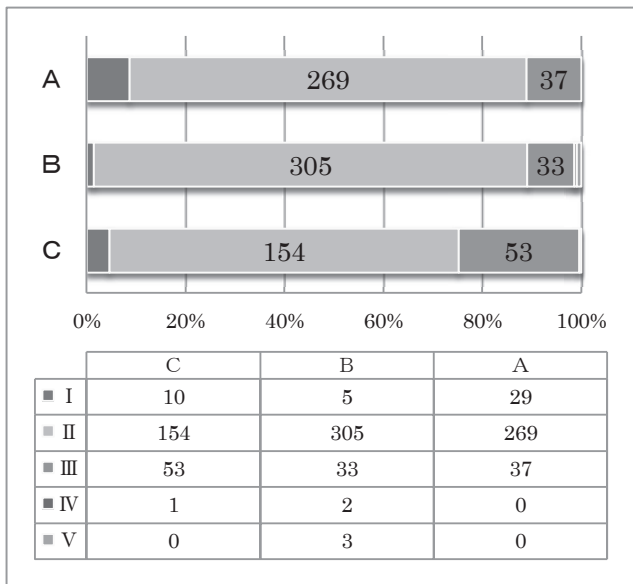
の筆記速度を考えると、多くの児童がほとんど手を止めることなく気づきを書き続けている様子が窺える。

一方で作品Cの気づきの数は、A、Bに比べて少ない。このような傾向は、最も気づきの絶対数が少なかった作品を基準に他の作品の気づきの数の割合を示した下表3を見てもわかるように、今回調査を行った他の学年の結果と比較して特に顕著である。

表3 作品別 気づきの量の比較

学年	A:クレー	B:ゴッホ	C:ダリ
小学1年生	1.54	1.6	1
小学3年生	1.28	1.42	1
小学6年生	1.18	1	1.04
中学1年生	1	1.2	1.14
中学3年生	1.16	1.19	1

<気づきの質>



作品Aと作品Bの気づきの質を比較すると、段階Ⅱの気づきが大半を占めており、これについてはさほど大きな違いはないが、段階Ⅰの気づきの割合には差異が認められる。また、Bでは僅かながら段階Ⅳ、Ⅴの気づきが出されているのに対し、Aでは全く出されていない。このことから、どちらも画面に描かれた客観的事実を見つけ出すには向いている（Aは色、Bはモチーフに関する気づきが主となっていた）が、Bの方がより自分なりの解釈や想像がしやすい、簡単に言えばわかりやすい作品ということが出来る。

これに対して、気づきの量が最も少なかった作品Cでは、段階Ⅲの気づきの割合（量も含めて）が他の2作品と比べて明らかに大きくなっている。つまり、気づきの質が、描かれた客観的事実よりも、そこから受ける印象にシフトしていることがわかる。

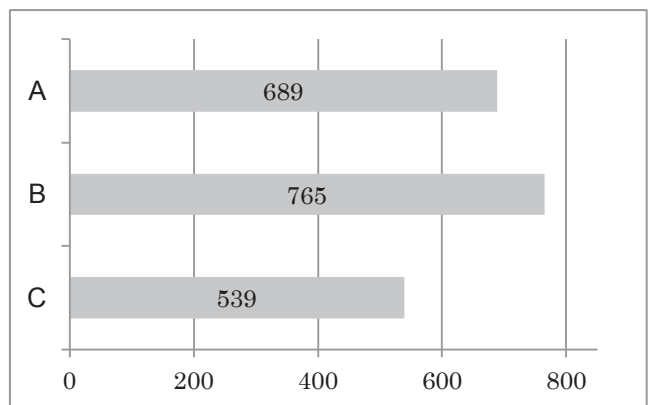
これらのことを総合して判断するならば、今回提示した中で、初めて鑑賞に出会う小学校1年生にとってより親しみやすい作品は、抽象や超現実的な世界を描いたものではなく、現実の生活に近い日常を描いたゴッホの作品と言えそうである。

<児童の書いた気づきの例>

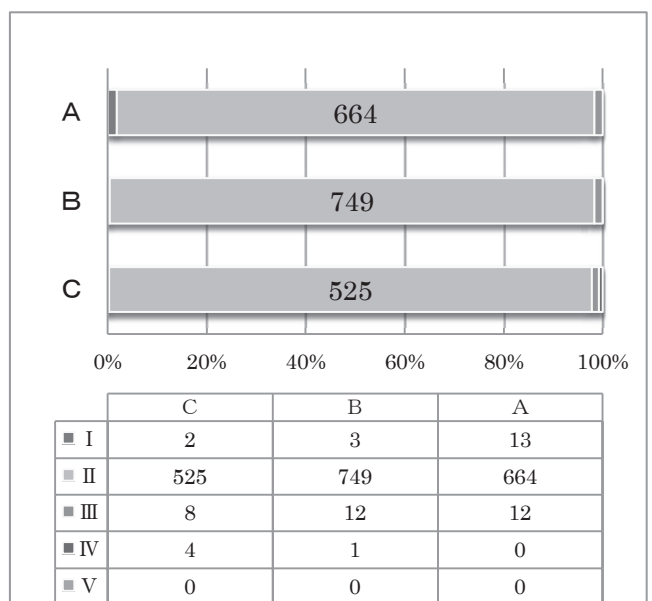
A	顔がへん（Ⅰ）だれも住んでいない国で生まれた（Ⅰ）顔が黄色とおうど色に分かれている（Ⅱ）首がねずみ色（Ⅱ）いろいろな色のお月様（Ⅱ）
B	壁がない（Ⅱ）外に机とイスがある（Ⅱ）馬に乗っている人（Ⅱ）星がうつらなっている（Ⅱ）地面に模様（Ⅱ）ミュージカルみたい（Ⅲ）明るい所と暗い所（Ⅳ）奥のものは前のものより小さくかいてある（Ⅴ）人の顔がモザイクでかくれている（Ⅴ）
C	薄い時計（Ⅱ）白い卵が二つ（Ⅱ）原爆の時だと思ふ（Ⅲ）時計の国（Ⅲ）暗い所は地獄（Ⅲ）この白いのはスーホの白い馬（Ⅲ）暑い所なのだろう（Ⅲ）ここはどこだろう（Ⅲ）空が綺麗（Ⅲ）今がある（Ⅳ）

(2) I期：小学3年生…32名

<気づきの量（総数）>



<気づきの質>



3作品の気づきの量の比較においては、絶対数こそ違うものの1年生と全く同じ傾向が見られる。特筆すべきは、気づきの質の割合である。どの作品でも段階Ⅱの気づきが約97%を占めている。段階Ⅰに相当する気づきがほとんどないことから、作品を離れて勝手に空想を繰り広げる児童はいないと判断できる。つまり3年生の児童は、とにかく3つの作品を細部までよく見て、色や形、モチーフなど、画面に描き出された要素を見つけることに集中したということである。

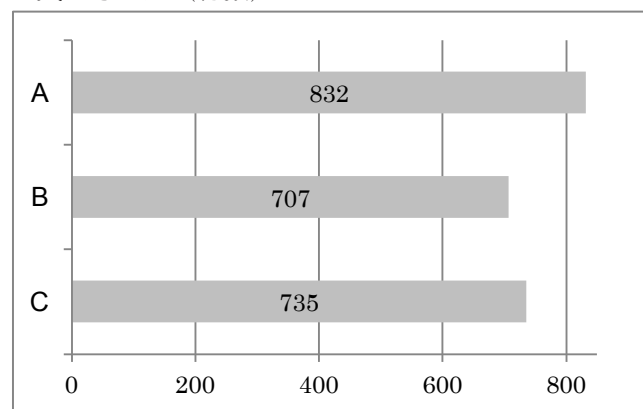
同じⅠ期に属する学年ということで、1年生の結果と比較した時、特に作品Cにおける段階Ⅱの気づきの数が3倍以上になっていることに気づく。『記憶の固執』でダリが表現した、超現実的で不気味な世界。そこに描かれた、1年生にとっては不可解であったと思われる様々なモチーフやその関係を自分なりに捉え、何とかして言葉に置き換えようとする3年生の姿が浮かぶ。今回の調査結果からは、量、質共に特に大きな特徴を見出すことができず、どの作品が3年生にとって最も鑑賞しやすいものであったかを断定することはできないが、様々な色や形、モチーフを「見つけ出す喜び」を味わうことのできる作品が3年生の児童の鑑賞に適していることは確かであろう。

<児童の書いた気づきの例>

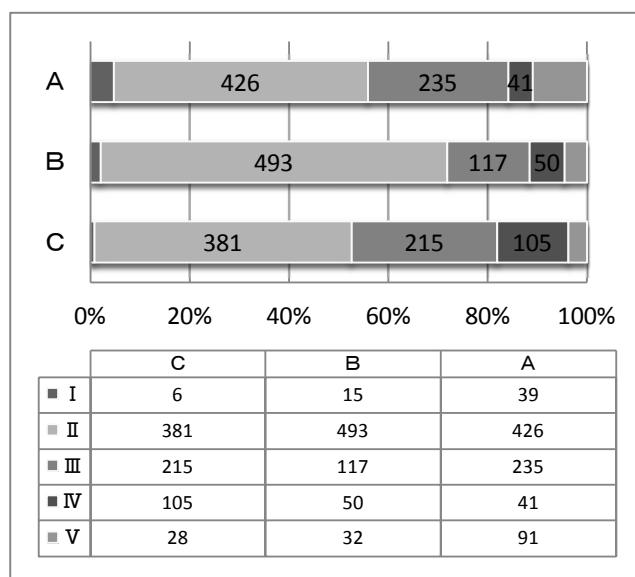
A	不思議(Ⅰ)背景がオレンジ(Ⅱ)白い三角形(Ⅱ)赤目玉(Ⅱ)四角がいっぱい(Ⅱ)白いパネル10枚(Ⅱ)髪がない(Ⅱ)おじさん(Ⅱ)ワイングラス(Ⅱ)ブロック(Ⅱ)目の位置が違う(Ⅱ)
B	黄緑(Ⅱ)青い家(Ⅱ)赤い服(Ⅱ)ランタン(Ⅱ)塔(Ⅱ)テラス(Ⅱ)休んでいる人(Ⅱ)電話ボックス(Ⅱ)外国(Ⅱ)空に星(Ⅱ)石の道(Ⅱ)二階建て(Ⅱ)馬車(Ⅱ)にぎやか(Ⅲ)
C	薄黄色(Ⅱ)Yの字(Ⅱ)乾かされている時計(Ⅱ)6:00(Ⅱ)アザラシ(Ⅱ)時計の影(Ⅱ)プール(Ⅱ)何かの動物が死んでいる(Ⅱ)鳥の上に時計(Ⅱ)影がある(Ⅱ)タイムスリップした感じ(Ⅲ)

(3) Ⅱ期：小学6年生…37名

<気づきの量(総数)>



<気づきの質>



3作品の気づきの総数そのものにさほど大きな差はなく、どの作品にも万遍なく興味をもって鑑賞できている様子が窺えるが、作品Aの気づきが最も多くなっているのは、他のどの学年にも見られない特徴である。

質に目を向けると、段階Ⅲの気づきが作品Aにおいて最も多く出されていることがわかる。(この段階に限って言えば、作品Bのほぼ2倍に相当する。)クレーの描いたこの作品は一人の人物の頭部のみを描いた肖像画であり、しかも抽象表現である。したがって、児童の鑑賞の視点は、「何が描かれているか」から「どのように描かれているか」、つまりモチーフから表現方法へとシフトされることになる。6年生の児童は、暖色系を主とした特徴的な色づかいや、まるでパズルのような幾何学模様で埋め尽くされた画面から受けた自分なりの印象を、比喩等を用いて書き表していた。

また、作品Cについては、段階Ⅳにあたる気づきの量が他と比べて大きく増えている。卓越した描写テクニックをもつダリの描くモチーフの一つ一つは極めて写実的であり、実際にそこにあるかのような存在感を放つ。その意味で、3作品の中で最も画家の技能が際立つ作品と言える。児童は、超現実的な構図の中に配置されたそれらのモチーフを結び付けながらまるで謎解きのようにしてイメージを広げていったのであろう。

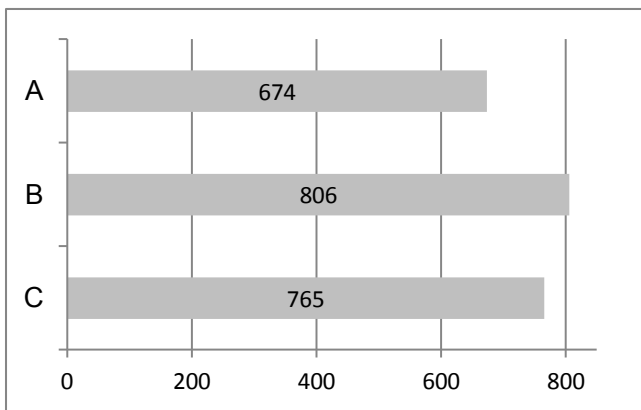
作品選定の理由でも述べたように、Ⅱ期の児童・生徒は写実性や技量、美やリアリズムを重視する傾向にある。気づきの総数としては作品Aが最も多いが、そこには段階Ⅰ、つまり作品そのものから乖離しているように感じられたり、根拠のはっきりしない感覚も一定量含まれたりしている。これらのことから、この時期の児童は、ダリのような画風に強く興味を惹かれるのではないかと推察できる。

<児童の書いた気づきの例>

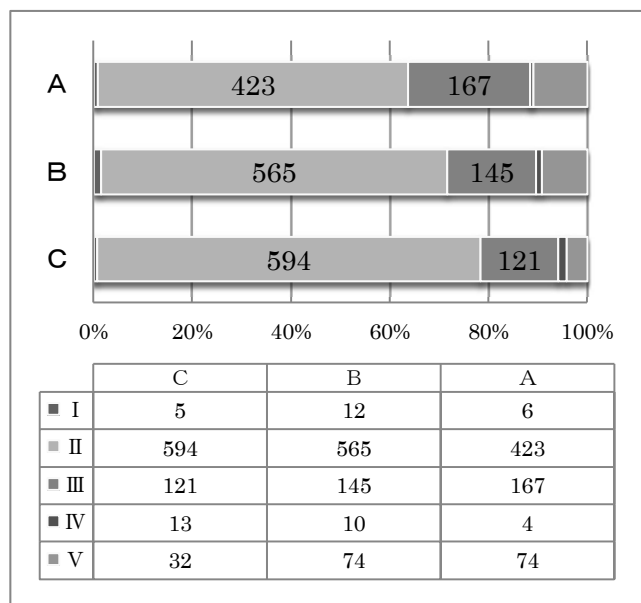
A	正直、気持ち悪い (I) 面白い (I) 左を見ている (II) 少女 (II) 頬がピンクで恥ずかしそう (III) 目まで赤くして喜ぶ (III) サーモグラフィーみたい (III) 心を持ったロボット (III) 情熱的な恋をした (IV) いろいろな感情 (IV)
B	二人か一人の人が多 (II) 黄色い建物の上に階段 (II) 星がたくさん光っている (II) ハリーポッターの通り (III) おいしそうな匂い (IV)
C	絵の後ろか右に太陽があって照らしている (II) 家具から木が生えている (II) 物が融けるくらい熱い所 (III) 死んだ時計 (IV) 影と光の差が凄い (IV) 砂漠に水という希望がある (IV)

(4) II期：中学1年生…40名

<気づきの量 (総数)>



<気づきの質>



中1の結果を質的に分析すると、III、IV、V各段階の気づきが増え、全体の約5分の1～3分の1を占めている。特にI期では見られなかったV段階の気づきが、作品A (11%) や作品B (9%) に多く見られるようになる。色使いや描き方、構図や技法など、造形要素に関する気づき、あるいは作品の主題 (あるいは

作者の表現意図) に対する自分なりの解釈をしながら絵を鑑賞していることが分かる。

小学校図画工作科と中学校美術科の教科としての捉え方も大きく影響しているであろうが、自分の思いのままに自由に感じようとする小学生と、ある程度の科学的認識や美術的な知識を鑑賞に反映させていく中学生との違いが表れているものと思われる。

中学校ならではの特徴として、段階Vに焦点化して次の通り作品ごとに気づきを分析してみた。

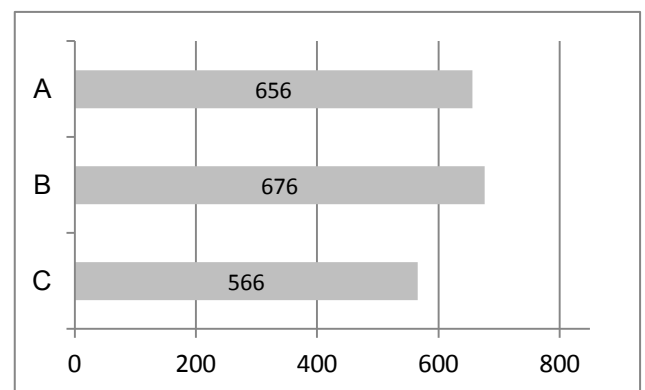
作品Aで出されたV段階の気づきは、造形的要素に関するものが88%を占め、作品の主題に対する自分なりの解釈に関する記述の割合は、12%であった。作品Bでは、そのすべてが造形的要素に着目したものであり、作品の主題に対する自分なりの解釈に関する記述は見られなかった。作品Cでは、造形的要素に関するものが53%、作品の主題に対する自分なりの解釈に関するものが47%と、ほぼ全体を二分する形であった。

<生徒の書いた気づきの例>

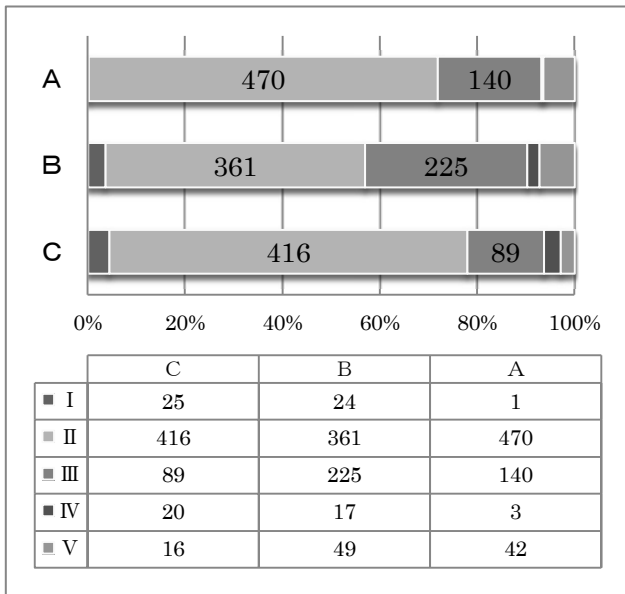
A	なぜこの絵を描いたのだろう (III) 月みたい (III) 明るく軽いテンポの曲 (IV) 赤い目がアクセント (V) 線対称みたい (V) 無を伝えたい (V) 民衆の感情 (V) 人間の温かさを伝えている (V) 喜怒哀楽 (V) 僕には見えるお前の未来が (V) 自画像に見える (V)
B	空は藍色 (II) 中にも人 (II) 街がおしゃれ (III) 音響が聴こえる (IV) 暖色のところは温かそう (V) 強調したいところの色の工夫 (V) 目立たせたいものを目立つ色で (V) 光の使い方が上手 (V) 空と建物の色使いの違いが面白い (V) 一点透視図法 (V)
C	無人島 (II) 時間が違う (III) 非現実的 (IV) 背景の色が複雑 (V) 細かいところまで工夫 (V) 作者にとって大切な時間 (V) 地球温暖化 (V) 時間は進む (V)

(5) III期：中学3年生…39名

<気づきの量 (総数)>



<気づきの質>



気づきの総数を見ると、ゴッホ、クレー、ダリの順になった。調査実施前は、Ⅲ期で最も多くの気づきを生むのはダリであると想定していたが、ゴッホの作品からいろいろなことを想像する生徒が多かった。画面に描かれた客観的事実を根拠とする気づきや思いが多く、技法などの造形要素に関する気づきもゴッホが一番多い、という結果になった。

質的に分析すると、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ各段階の気づきが全体の4分の1を占めていることから、美的対象を科学的概念との結びつきの中で捉え直し、より高次な思考及び判断をするようになっていいると考えられる。

また、児童・生徒の書いた気づきを今回の調査全体を通して比較すると、Ⅰ期に比べⅡ期、Ⅲ期は、文または形容詞などで修飾された言葉が増えてくるのがわかった。

<生徒の書いた気づきの例>

A	半分オレンジ半分金髪の人(Ⅱ) カクカクしている(Ⅱ) 素朴な感じがする(Ⅲ) 濃い(Ⅲ) 表情がない(Ⅲ) 抽象画(Ⅴ) 対称角みみたいな(Ⅴ) ぼかしている所がある(Ⅴ) 色々な形で形成されている(Ⅴ)
B	黄色が蛍光みたい(Ⅱ) 地面がでこぼこ(Ⅱ) カフェの上にも家(Ⅱ) 人気の店(Ⅲ) 何が飲めるかな(Ⅲ) 夜の10時頃(Ⅲ) 大人の楽しみ(Ⅳ) 一転透視図法(Ⅴ) 色のバランスが良い(Ⅴ) 油絵(Ⅴ)
C	黒いつやつやした虫(Ⅱ) 金銀銅の時計(Ⅱ) 時計は多分止まっていると思う(Ⅲ) 不思議な段差(Ⅲ) 風が少し吹く(Ⅳ) この作品が表わしているのは悪いことがあった時間(Ⅴ)

4 おわりに (成果と課題)

平成20年版の学習指導要領(図画工作、美術、芸術(美術))の改訂に当たっては、改善の基本方針として「よさや美しさを鑑賞する喜びを味わうようにするとともに、感じ取る力や思考する力を一層豊かに育てるために、自分の思いを語り合ったり、自分の価値意識をもって批評し合ったりするなど、鑑賞の指導を重視する。」ことと同時に、「美術文化の継承と創造への関心を高めるために、作品などのよさや美しさを主体的に味わう活動や、我が国の美術や文化に関する指導を一層充実する。」ことなどが示された。これらは鑑賞活動に関する改善である。

本研究では、ここに指摘された鑑賞活動を、図画工作や美術における中心的課題である「表現すること」の根底にある「みる」行為や「考える」行為として捉えると共に、これを児童・生徒の発達段階の実態をふまえながら効果的に進め、学習として保障するためには、いったいどのような作品を選ぶことが適切なのかを検討することを目的とした。

その結果は第3章の各節で詳細に明らかにしたところであるが、この鑑賞活動に関して、引き出された気づきの数的な検討からは、作品によって児童・生徒の気づきを引き出しやすい作品とそうでない作品があるといった違いが確認できた。また、引き出された気づきの質的な検討からは、児童・生徒を上位の鑑賞段階に導きやすい作品とそうでない作品があることが確認できた。これらが本研究の成果であった。

我が国の図画工作・美術科教員は、これまで作品に対する教師個人の強い思いや経験に基づく作品選びによって大きな教育成果を残してきた。本研究はこのような作品選びに一石を投じると共に、更に高い教育効果を生むことが期待できる新たな視点を示せたのではないかと考える。

一方、今回の研究は、前述した我々の問題意識を紐解く端緒の試みであったことも事実である。人や作品などの対象数その他の条件をさらに整備する積み重ねによって、この研究の精度を上げること、更には判別分析などの手法の導入によって児童・生徒にとって適切な作品の特徴の一般化を探ることが次の課題として指摘できよう。

引用・参考文献

- 1) Michael J.Parsons (1987)『絵画の見方』Cambridge University Press.